

能登 いまい農場だより 新年号(1月号)

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。
能登は、昨年末からの寒波で、うっすらと雪化粧しています。
皆様、いかがお過ごしですか。

■米の販売競争と地域振興

平成30年産米より、強制的な減反政策から、農協を中心とした自主的な取組になるといわれています。

先般の(ネットから引用)、産経新聞によると全国過半の26県が従来方式を継続するという。

石川県も従来方式を選択したと聞いています。県、地域の農業活性化協議会(農協含む)が農家ごとの生産目標を定め、(農家に)通知するやり方です。

私が知り見ている限り、この地域活性化協議会なるものが、くせものなのです。しっかりと未来を見据えた政策が取られれば良いのですが、どうもちょっと？

国の政策に振り回されている感があるのですが、疑問符が付く政策が見受けられます。

私の近隣の事例になりますが、4年前の話、30年に減反廃止が決まると、石川県下でうちのJA(農協)管内だけ、その時まで継続していた、水稻の有機栽培の20%、水稻の直播き栽培(種籾を直接田んぼに播く栽培法)の12%を減反率としてみなしていた制度を縮小化、その分をうすく広く他の農家に配分しました。有機栽培は地球温暖化 二酸化炭素削減の究極の技術ですし、直播きは、育苗を省略するコストダウンの技術です。いわば、一生懸命努力し先駆けでやっている農家が標的にされるといった逆の政策が行われています。飼料米を生産すれば、国から多くの補助金が付くのですが、これにも、市町村から上乘せ金が付いています。地域に畜産農家が多ければ納得がいくのですが、指折り数えるほどしかおられません。地域の政策が「明日の金より、今日の金」といったことに疑問を感じ、これは見過ごせないと思い、市町村職員、JA職員にアタックし、行動している最中です。



世界農業遺産「のとの里山里海」に認定されてからもう6年以上経過しました。観光面では輪島市の「千枚田」をはじめ、「あえのこと」「あまめはぎ」といったことが文化面で知られるようになりました。しかし大きな川のない能登半島では、水田を耕作するために山に植林管理し、水を得るために、ため池を作り、稲を作ってきました。その結果として、祭りが多く残り、生物多様性も生まれました。いわば、米作りがメインなのですが、地元の人あまりこのことに力を入れていません。先のJAの職員にも、能登の特徴を活かした米作りにもっと力を入れ、「田んぼの生きもの調査」など消費者にアピールして環境を守っていく姿を目に見える形で伝えることが大事ではないかと訴え、「そうですね」との言質を頂きました。

(裏面に続く)

■配送料金の見直しについて

現在、ゆうパックを利用し、皆様に商品をお届けしているのですが、その日本郵便(株)から、ゆうパック料金の見直しということで、通知が届いています。3月1日より大きさ、重さごとに料金設定し、配送料金を上げたいとの提案があり、同業他社も同じような動きがあるものですから、受け入れざるを得ないかなと考えています。現在のところ、3月1日からの基本運賃表が届いているだけで、特約運賃の交渉まで至っていません。交渉し、決まれば、皆様に再度、お知らせし、お願い申し上げます。

勝手なことを書きましたが、暑く燃える覚悟で今年も頑張ります。

能登半島の良き景観・水田周辺の小動物(生きもの)を将来にわたり保つため、安心安全な米作り、強くこだわりを持ちながら、米づくりに励みたいと思います。応援よろしくお願い致します。